

満洲を再訪して

大野 正夫 (四組)

一九四六年八月末に葫蘆島より五歳九カ月で引揚げた。二〇一〇年に生まれ故郷、錦州と、終戦後一年を過ごした奉天を訪れた。その時の情景を漢詩にしました。漢詩の吟詠通読を添えます。

想満洲

平原如海奄高粱

鐵路悠々萬里長

大地景觀在眸裏

緬想亡国對斜陽



# 満州を想う

大野正翔

平原 へいげん | 三  
海 うみ の ごと 如 ごと く  
高粱 こうりょう に 六  
奄 おお わ お れ | 三

鉄 て 路 つろ は | 二  
悠 ゆう 悠 ゆう | 三  
万 ばん 里 り | 六  
長 なが し | 五

大 だい 地 ち の 七  
景 けい 観 かん | 七  
眸 ぼ 裏 り に 七  
在 あ り | 三

緬 はる に 二  
亡 ぼう 国 こく を 三  
思 おも う 二 て  
斜 しゃ 陽 よう に 七  
对 たい す | 五

## 【解釈】

満州の平原は、見渡す限り高粱の畑ばかりで、まるで海のようにみえます。鉄道は、いったいどこまで行くのか、遠く遙かなたまで続いています。その広々としている大地の景観は今でもはつきりと瞳の奥に残っています。夕陽のなかで、今は亡き国、遠い満州のことを思い出しています。